

# シンポジウム in 佐渡

事務局

「未来に受け継ぐ伝統的知恵」と題して、10月4日佐渡マリンプラザ小木(おぎ)でシンポジウムを行いました。当日は、加藤三郎共同代表、深浦元気会の菊池繁治氏(「磯ネギの明日～三崎らしい暮らしの行方」)、長野県農業大学校の吉田太郎氏(「ふたたび牛で耕す時代はくるか～キューバの事例から」)からの問題提起のあと、藤村コノエ共同代表の進行でパネルディスカッションを行いました。(以下、敬称略)

## 問題提起1

### 「温暖化時代における島への期待」 加藤三郎

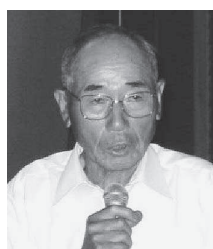
環境文明21は、持続可能な社会の形成に活かす8つの伝統的知恵を提案してきた。地球温暖化の影響、それに対応するための方法を考えてみると都会的・商業的な意味ではなく、持続可能な社会の形成の理想郷という意味で佐渡は最先端に成り得るのではないかという結論にたどり着いた。

具体的には21世紀の猛烈な環境異変の中で、食糧の自給が重要になってくる。佐渡は農業、漁業が可能であり、少なくとも人間が生きるうえで最低限必要なものがある。また、食以外に文化、エネルギーがなければ生きていけないが、残すべき文化の継承、自然エネルギーの自給を可能にすれば佐渡はその面でも優位にある。佐渡が最先端になるためには、外から見た佐渡の価値と中から見たそれとをすり合わせ、価値を再設定し、地元の人を中心となって頑張っていく必要がある。

## 問題提起2

### 「磯ネギの明日～三崎らしい暮らしの行方」

菊池 繁治 (深浦元気会)



磯ネギとは磯の近くで行う漁のことである。深浦地区は佐渡の南西にある小さな集落で、私はそこで半漁半農を営み1年の大半は、たらい舟で漁をしている。最近は温暖化の影響なのか海水面の上昇や水温の上昇、漁獲高の減少など、海の環境の変化を感じるところである。

たらい舟はリアス式海岸のような細かい入り江にも入ることができ、また、労力もかからない、小回りが利く、安定性があるなど、非常に貴重がられる船である。エネルギーは人力だけだ。

温暖化の影響か天然のワカメが大量に採れるが色合いが悪いため値がつかない。これを何とかしたいが、価値が見直される時が来るまで待つしかない。今は、漁師にとって大変苦しい時代であるが辛抱するしかない。

最近は魚の値段は安く乱獲に走りがちであるが、私達は一定の漁獲にすることを集落のルールとしている。半世紀ほど続いている磯ネギでサザエがなくなったという話は聞いたことがないから、この技術を残したいと考えている。磯ネギはたらい舟を使い鏡で映ったものしかとらないから、深いところには限度がある。資源も自然もある程度守っていけるたらい舟を使った磯ネギを特に奨励していきたい。小学生を対象とした、たらい舟操縦法の指導をしており、今後も伝承してほしい。

## 問題提起3

### 「ふたたび牛で耕す時代はくるか～キューバの事例から」

吉田太郎 (長野県農業大学校)



キューバは同じ共産圏のソ連からの支援によって途上国の中では驚くほどに近代的な農業を営んでいた。しかしソ連崩壊後のアメリカによる経済封鎖の結果、GDPは-35%、農業生産はガタ落ち、輸出入の規制、国民消費カロリーが半減した。そこで国を

挙げ石油に頼らない有機循環農業を展開していった。

その際に注目されたのが牛耕である。伝統的農家は機械化が進む中でも牛耕を伝承していたため、その残されたノウハウを、国を挙げて活用するという方策をとった。牛耕は機械と違って壊れにくい、部品がいない、地面に余計な負荷をかけないなどのメリットがあることが分かってきた。現在では生活のあらゆる場面で牛や馬が活用されている。1960年頃はエネルギーレベルの7割を家畜が担っていたが、90年代は家畜のエネルギーの割合は8.3%まで落ちた。それがソ連崩壊後の経済危機を経て、牛とトラクターのエネルギーレベルのバランスは半々となっている。

キューバを含めた南アメリカ諸国の出来事は我々の生活に無縁ではない。BSE問題はキューバを経由して日本に波及した。新自由主義を経験したメキシコではテロが起こった。

「永続農業」という言葉を作ったアメリカ人のキング氏は、日本の本来の農業こそ素晴らしいものであるとしている。本来目指すべき姿のルーツは我々の祖先にあるのではないだろうか。

## パネルディスカッション

**藤村：**皆さんが日ごろ感じている佐渡の魅力について教えてほしい。

**会場：**子供のころに住んでいた環境がすばらしい。佐渡全体・海・山。そしてみんなが良くしてくれる。

**会場：**共同で営んでいた牛耕、トキが飛ぶような水田があったこと。

**会場：**古いものを大事にしている。小学校では親子で参加できる昔の生活を伝えるための体験学習がある。

**藤村：**横浜市から佐渡に家族で移り住んだ十文字さんはどのように感じいらっしゃるか。

**十文字：**外からの視点と中からの視点で二つに一つでは話が進まないということを感じている。中の人は外から来た先生の話に感嘆し、また次に来る先生の話聞いてみようとその繰り返し。そこで



「接着剤」になる新佐渡人がこれからどこまで増えるかということにかかわってくると思っている。  
**藤村：**平成19年に開校した「伝統文化と環境福祉の専門学校」の学生にも意見を聞きたい。

**会場：**私は神奈川県横浜市から来た。東京は簡単に言うと緑も水が流れている所もない。時間の流れも違う。佐渡は人が住む所だ。佐渡に来て私は早起きができるようになった。このような所に住みたいという人はたくさんいると思う。

**会場：**建築を学びたい理由から、佐渡は伝統的建造物などが多いということもあり、佐渡に住んでいる。とても住みやすく周りの人も優しくいい人だ。

**会場：**アメリカ在中の息子が「佐渡はすごい」と年に5・6回帰って来るようになった。これまで見ることができなかった祭りに参加し、それらをネットで紹介したところ、日本でこんな祭りがあるのかという反響があった。私はすごいところに住んでいると再認識した。その様な人たちと佐渡を繋げていきたい。

**吉田：**佐渡の素晴らしさを継続させるためには、やはり仕組みが必要である。若い人の生活が成り立つよう、価値を認めさせる経済的仕組みを整えていく必要があると思う。

**菊池：**地球温暖化の傾向を感じる。漁獲高も減っている。今の技術で乱獲をしていくと将来食卓を満たすことができなくなる。その時は大変な時代になるだろう。今は経済的には大変だが辛抱して、必ず佐渡の資源が必要とされる時期が来ることを期待している。